

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
令和元年八月一日発刊
百特別授承認雑誌第六二七号
百二十二卷第八号

ホトトギス

八月号



風雅の小筥〔十九〕

廣太郎

先月の稿が平成最後に書いたと申し上げたが、この「十九」を書いているのは令和元年五月八日で、令和になって初めての稿である。平成三十一年四月二十七日から五月六日まで十連休という方も巷ではおられるという事だが、私はほぼ毎日句会があったり、公益社団法人日本伝統俳句協会の理事会や公益財団法人虚子記念之文学館の理事会等に費やしていた。

今回は、その平成の終りから令和の初めにあった句会、いやもつと以前からもこの傾向はあったようだが、つまり句の中で「平成を惜む」という意味の句や、四月一日に令和が発表されると「令和を迎える」という意味の句も加わり、とてもおめでたい雰囲気句が増えている。それは大変喜ばしい事で、勿論どんどん詠んで頂きたいとも思うが、気を付けなければならぬと思うのは、やはり類想にならないようにしなければならぬ。という事だろう。こう申し上げると、却って類想を恐れるがあまりこの発想を句にはしない、という心配もあるが、決してそのように申し上げていいものではなく、汀子も申しているように類想は恐れず詠むのは大歓迎である。ただ、その句が後世に残るかどうかは又別の話である。ちよつと例が単語になってしまい、少し種類は違つかも知れないが、以前大流行した言葉が多く俳句に詠まれたが、今ではすっかり消え失せてしまったという例を思い出されるのではないだろうか。「イナバウア」「千の風」等、あれだけ句に詠まれた言葉が、今詠む方がどれだけいらつしやるだろう。作品というものは、やはり普遍的な魅力があるものである。

句日記 汀子

平成三十年八月五日 下朝句会

気づきたる時は終りし花火の夜
溝萩やどこかにひそむ水の音
体調をいとふ晩夏でありしかな
人数の揃ひたるより花水

八月六日 ロイヤル俳壇

赤のまま摘めば草の香手に移る
新涼の話弾んで行きにけり

八月七日 大阪倶楽部

蜘蛛の命の果てと聞く山路
立秋と思へぬ大地ありにけり
朝顔の咲き残りぬし旅帰り
その日より心に重ね来し墓参
予定とはあつて無き如秋に入る
残暑とは思へぬ朝の来てをりぬ

八月七日 綿業倶楽部

期待せし旅はや遠し星月夜
一と雨の欲しき残暑と思ひけり
ふり返る三瓶の旅の星月夜
喪に籠る友に残暑の如何ばかり
いつまでもいとふ残暑でありしこと

八月九日 清交社

この秋をいかに乗り越えゆかんな

うかうかとしてぬし秋の一日か
予定とはあつてなきとも秋の暮
墓参する時間やりくりしてをりぬ
スケジュール通りに行かぬ秋となる
葦の花水音に沿ひゆける道
若かりし夫の生涯偲ぶ秋

八月十五日 夏潮句会

その頃の若さもうなし初嵐
残暑なほ稿償追はれぬるばかり
旅予定次々迫り一くる残暑
原稿の催促ありぬ初嵐
さまざまな悲しみ込めて初嵐
灯下親し初代吉右衛門丈逸話

八月十八日 東北ホトトギス俳句大会前日句会

爽やかな旅となるべしみちのくは
快晴や奥の細道辿る秋
爽やかや芭蕉ゆかりと聞くことも
秋の雲うすうすとあり奥の旅

八月十九日 東北ホトトギス俳句大会

薄紅葉より鳥の声旅の声
薄紅葉のくの旅果てんとす
薄紅葉薄々紅葉奥の旅

八月二十一日 有恒俳句会

朝の鳴き止む荘に夕べ来し
星月夜三瓶の旅路ふり返る
新涼や怪我也忘るるほどのもの

爽やかといふほかはなき奥の旅
一つづつ片付く仕事新涼に
新涼にやうやく気力とのへり
みちのくの新涼の旅ふり返る

八月二十一日 無名会

奥の旅終へて残暑の家路かな
初秋の身軽な旅荷ととのへり
忘れぬし残暑の外出なりしこと
旅疲れ癒やす家居や新涼に
夕風に消えゆくほどの残暑かな
よく晴れしことが残暑をつのらせる
台風の前報に一喜一憂す

八月二十四日 アネモネ句会

朝顔や昨日と違ふ今日のあり
新涼や昨日のことはもう忘れ
新涼の夕べとなつてふり返る
台風にご鑑ひて出掛け来し
新涼の旅路に期待ありにけり

八月三十一日 時雨句会

健康と新涼の日を待つばかり
新涼の期待の旅とならざりし
八月は今日まで心切替へて
又怪我の話新涼とはならず
週末の予定新涼遠ざからず
八月に置いて行きたき不順かな
朝顔に明日の蕾といふ期待

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年八月二日 蕉心会

会津より炎帝苞としたる句座
露涼し会ひたき人に会へし旅
冷房を梯子しながら句座に着く
炎天下大悪人となりし旅
火星見し目に炎天は眩し過ぎ
瘦身に片陰はこれだけで足る
こんな日も汗をかかなくなりまし
結局は麦茶選びし販売機
扇の手顔は四十五度傾げ
吟行は冷房効きしレストラン
八月三日 カトリック新聞選者吟
花水 数多叙階の慶びに
八月四日 鬼貫顯彰俳句大会
故郷へ晩夏へ鐵路伸びゆけり
八月五日 野分会吾屋例会
港の灯ねぶたに溶けてゆきにけり
みちのくの夜をねぶたに明け渡す
新豆腐虚子の酒てふ伴侶かな
八月五日 青嵐会吾屋例会
秋暑し川の流れを堰き止めて
目の奥に残暑纏ひし怒りかな

残暑切り裂いてサヨナラホームラン

八月九日 土筆会颱風により句会中止後日選

鳳仙花 熱く語つてをりし過去

門火 焚く黄泉を繋げてをりにけり

八月十六日 北國文芸選者吟

鳳仙花 弾けて星になりたくて

八月十六日 登高会

新涼に猫丸まつてゆく仔細

光年を統べ流灯の星となる

赤まんま第三幕のプロローグ

流灯や過去を語らず未来へと

新涼の風川幅を仕上げゆく

赤まんま地震の記憶を色に秘め

八月十七日 廣邦会

軽々と西瓜提げ来る力士かな

八月十八十九日 東北ホトトギス同人会、大会

弁慶の笈てふ灯下親しめり

秋風を集め山門鎮もれり

運転を断念したる露けき手

鬮雲その他蒼天画布として

八月二十日 朝日カルチャー若草句会

遠花火耳に掛かりし君の息

助手席に我が物顔の西瓜かな

銀河濃し天地創造語るかに

梯は銀河の星の欠片にも

八月二十二日 目学園句会

蓼の花都心の路傍淋しめず

蓼の花草に埋もれし忠魂碑

列島を弄びたる初嵐

丸ビルを唸らせてゐる初嵐

初嵐 鴉を宙に貼り付けて

而して南瓜半分買ふ漢

八月二十六日 青嵐会東京例会

花木 檜圓の要の色として

秋の蟬平成の世を鳴き急ぐ

空に伸ぶクレーン 残暑掻き混ぜて

落し文 乾き切つたる固さかな

八月二十六日 野分会東京例会

みちのくの妖しく暮れてねぶたかな

ねぶた果てみちのくらしく明け初むる

新豆腐 廣京の老舗といふ矜持

八月二十九日 若水句会

いんげんの蔓 青空をはみ出して

丸の内ビルの底より秋めける

三箇月ぶりの散髪 秋めける

皿に盛るよりいんげんの主役かな

エルニーニョラニーニョ忙し初嵐

神宮の杜に鳴くもの秋めける

八月三十日 静の会

潮騒の音色 変はりて秋立てり

今日の秋スパイス 変へてみるカレール

立秋や君の瞳の濡れ具合

雑詠

廣太郎 選

一廉に莖立ちをりし庭のもの 神戸 後藤比奈夫
 端切づぎ合せ夏めく布巾出来 同 同
 その話人に聞かせず山菜莢黄 同 同
 この海を平家は西へ月おぼろ 同 藤井啓子
 海底に大和あるまま波おぼろ 同 同
 顔の影うつくしき春日傘 同 同
 白梅の白を深めて濃紅梅 龍ヶ崎 今橋眞理子
 咲きすすむ刻をとどめて花の冷 同 同
 月朧雲よりこぼれ落ちさうに 同 同
 春光の中ひかり号のぞみ号 袋井 湖東紀子
 風船の色とりどりに押合へる 同 同
 初蝶となりぬ光をこぼれ来て 同 同
 花下にて我といふものあらざりし 神戸 立村霜衣
 浮き上がり流れ行きやがては落花 同 同
 折々は光降り来る花曇 同 同
 初蝶を誘ひ出したる海の風 東京 山田閨子
 もつれては離る蝶のまたもつれ 同 同
 み吉野の水音蝶を放ちけり 同 同

明けそめてまだ黙ふかき花の谷 長岡 安原 葉
 春眠のほどよき車中一人旅 同 同
 ふと潮の香も深川の春の風 同 同
 鳥帰り北方四島帰らざる 福山 竹下陶子
 まだ蝌蚪の紐とはならず大毬に 同 同
 吾に宿る怠惰の鬼に豆を撒く 同 同
 雛箱の式圓の値札古りにけり 東京 橋本くに彦
 土ひひな並べ序での招き猫 同 同
 膝に眠る主役雛の宴最中 同 同
 渾身の直球投げて卒業す 神戸 涌羅由美
 青春のあの日を行き来する朝寝 同 同
 青空を喜びすぎて花辛夷 同 同
 春陰や一人に野良の動き出す 香川 湯川 雅
 我が影の胸の辺りに鼓草 同 同
 芯の無き春愁に芯一忌日 同 同
 芽柳の風の終はりの太鼓橋 神戸 山田佳乃
 ほんのりと口を開けたる古雛 同 同
 若鮎の水引つ張つて遡る 同 同
 女人にてゐたし修二会に入りたし 同 同
 山笑ひ風は唄つてをりにけり 同 同
 忘れたくないとつぶやく花の宵 同 同
 山雨来てわが全身の芽立ち急 熊本 岩岡中正
 この雨に神話の大蛇穴を出る 同 同
 春の鳩流されていよいよ無心 同 同

雑詠句評（七月号より）

時間とは美しくするもの実朝忌 大阪 福本恵夢

「実朝忌」は陰暦一月二十七日で、鎌倉幕府の第三代將軍源実朝の忌日。二十七歳で右大臣に任ぜられ、翌承久元年（一二一九）鶴岡八幡宮に拝賀の儀を行なった帰途、甥の公暁によって暗殺された。歌人としても有名で、その墓は扇ヶ谷寿福寺にあり、今年は没後八百年という節目の年にあたるが、この句は、その事実を踏まえて詠まれた句であろう。「時間とは美しくするもの」という措辞はこの季題に実に相応しく、诗情ふかい句である。

作者はこの句を詠んで、本年三月九日、六十五歳の生涯を閉じられたという。ご生前の、俳句に寄せられた情熱に深く敬意を表し、謹んで哀悼の意を表します。（葉）

「時ものを解決するや春を待つ」という有名な虚子の句を思い出すが、本当に時間とは不思議なもので、現在の科学では人間は時間の操作をする事は出来ない。源実朝の時代、生涯を、時間を通して見事に描いている。平成三十一年三月九日、六十五歳の生涯を閉じられた事が悔やまれてならない。（廣太郎）

紅梅の香れば九年てふ月日 神戸 山田佳乃

筆者が俳句の手ほどきを受け、また現在主宰する俳誌の創刊者でもある母上への追慕の句。あらためて九年という歳月の迅さに驚きつつも、紅梅の美しさと香気に、しみじみと母を偲ぶ作者である。

「紅梅の香れば」と一寸止めて、「九年てふ月日」と静かに詠んで、余韻深く終る。「十年一昔（ひとむかし）」というが、この九年の自分の自立への歩みを天上から見守ってくれている母上への感謝の一句である。（中正）

九年というのは、やはり平成二十二年二月七日に急逝された御母堂様山田弘子様のお事だろう。今では立派に後を継いで「円虹」を守っておられる作者である。九年という微妙と思える歳月に、又改元も心に重なったのだろうか。平明に季題がそんな心持ちを語っている素晴らしさがある。（廣太郎）

天地有情

花子選

在りし日のままに椅子あり縁遅日
 ひとり身となりし気儘の旅遅日
 終電の尾灯目で追ふ夜寒かな
 秋の声芝生に沈む命より
 馬齢だけ虚子を超えたる年の豆
 励むことあれば春寒など忘れ
 春の塵にも好き嫌ひ家具の艶
 わが家にも春塵置くを許す家具
 少し濁りて春の川らしくなる
 この川を遡り来る春ならん
 今年まだ雛も飾らず夕心
 腹立ててをさまりてより日は永き
 反転の燕の自由試歩の我
 鮎子を一口と言ひ病床に
 美しくなる春雨に会ふたびに
 月光の届かぬ夜の花明り
 大揺れ小揺れなき花と詠み逝けり
 花を愛で花に囲まれ旅立てり

長岡 安原 葉
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 神戸 千原叡子
 同
 同 和田華凜
 同
 東京 河野昭彦
 同

初霜を侮ることのゆるされず
 草笛を吹きたる美術館庭に
 暖かやただそれだけで幸せに
 夕桜へとゆるやかにうつる刻
 暮かめる茶の間に今日も一人かな
 蝶現れてより新しき景となる
 啓蟄や蟻歓喜して這ひ出づる
 啓蟄や我も生きとし生ける物
 夜桜の闇の湿つて来たりけり
 お招きを受けたる御所の花の雨
 遙かなる嵐の海よ大南風
 海紅豆からりと上がる島の雨
 はらと雪花の吉野をさ迷へば
 散り初めて花の極みでありにけり
 老の句は早いと花に励まされ
 春愁や染井吉野も高齢化
 岷々として伊吹山は雪を弾きたる
 妻植糸し寒あやめなほ裏庭に

福山 竹下陶子
 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同
 東京 山田閨子
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 神戸 三村純也
 同
 東京 今井肖子
 同
 宝塚 水田むつみ
 同
 東京 大久保白村
 同
 吹田 大橋 暁
 同